

⑪ 吉備津彦命の船着場

足守川に突き出したその小さな石組は、春先の暖かい日には、冬眠から覚めた蛇の昼寝の場所となり、真夏には、子供達の格好の水遊びの場となりました。

こんな石組が、橋本町片上さん宅裏から中之町の江本少年宅の裏手、荒神畑にかけて四カ所ありました。ハトと呼んでいたそうです。

(中之町：江本昭衛さん)

また、富田さんのお話しでは、薬研淵の対岸下流あたりに船が泊めてあった記憶がある。廻船屋という屋号の大塚家があったとも…。ひょっとして、慶応3年(1867)建立の惣堂橋袂の灯籠に名を残す廻船屋利四郎と関係あるお家かもしれません。

自然堤防にくっつけられた小さな石組のハトは、足守川河川改修の後は一カ所に集約され、分別のつかない巨大なものとして残りました。今では、薬研に子供達の声も響かず、石組からダイビングをする姿もなくなりました。

さて、先輩諸氏のこのようなお話を聞いて、ある書物中の一文が頭の中をよぎりました。

話の舞台は有史以前に遡ります。その書、備中誌は、「井の鼻に吉備津彦命の船着場があった。」と記します。吉備津彦命の船着場ともなれば、軍兵の幾名かも乗せた船が発着出来なければ話になりません。

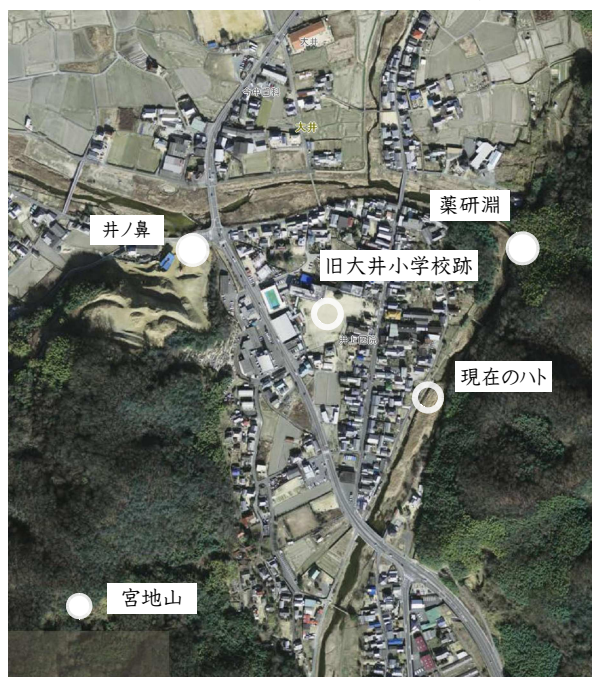
おそらく、吉備津彦命は吉備の中山(吉備津宮)から新山(鬼ノ城)の温羅と矢合わせを済ませた後、温羅との正面作戦を避け、百田大兄命の先導で大井川を遡上し、井の鼻から鬼ノ城の搦め手の岩屋へ回り、岩屋川を血に染める激戦の末、温羅に勝利したのです。



温羅の血を吸った石(岩屋血吸川源流)



河川改修により巨大化したハト



しかし、正保4年(1647)にして「大井上の渡り(場所は不明)」広さ十一間、深さ一尺ということでは、そのまた1000年昔のことだとしてもなんとなく心細い次第です。

本当に軍船は浮かんだのか…?

大井から直線で7.3km南。岡山市北区新庄下に国内第4位の造山古墳があります。4世紀から7

世紀といわれる古墳時代、その最も巨大化が進んだ5世紀代に築造された吉備の大王の墓です。盛り土の量は、約27万m³で大型ダンプカー約4万2千台分。墳丘を覆う葺石は、足守川上流の岡山市北区河原の黒谷ダム付近のもので約4千2百m³。葺石は採取から運搬・施工まで約20万人を要すると調べられています。運搬経路は当然、足守川です。(岡山県古代吉備文化財センター&大本組)



造山古墳:古代吉備文化財センター

そして今ひとつ、嘉永5年(1852)木村七郎左衛門により粟井竜王谷にあった古墳の石棺を高約3m、横1.3mの題目石に作り替えられ、大山道脇に建つ題目石があります。

この石碑は凝灰岩製で、平成26年に古代以前の採石遺跡としては初の国指定史跡に指定された兵庫県高砂市の「石の宝殿及び竜山石採石遺跡」で採取されたものです。これが遺跡の近くを流れる法華谷川から舟運で西日本各地に運ばれました。



竜山石製の久田の題目石

つまり、法華谷川を下り、瀬戸内海を曳かれ大井川を粟井のこの地まで遡上し、陸揚げされたということです。

そして、これが吉備津彦命の船着場として温羅征討の橋頭堡になろうとは誰も思わなかったのです。

なお、念のため旭川を上下した高瀬舟の川港の遺構の中にハトを探すべく、記憶をたどり真庭市勝山まで行ってきました。

すると、まさにそれらしき石組が存在するではありませんか。市の教育委員会の方にお尋ねしたところ、ナギとかナゲと呼ぶそうです。水流の方向を河川の中央に向ける仕掛けだそうですが高瀬舟もこれに着岸しました。大井のハトと同じものでしょう。

しかしマア、井ノ鼻に船着場が存在した可能性は、黒谷産の古墳の葺石と、久田の題目石に化けた竜山石のお話で充分でしょう。

宮地山の百田弓矢姫の許に通うための船着場ならこんなお硬い話にはならぬものを…。



葺石と思われる民家の石垣



黒谷地内の大山道脇の石垣



勝山の旭川船場の亀の甲状のナギ